

編集後記

本邦では2020年初頭から始まった新型コロナウイルスの流行により学会、研究会は軒並み中止され、対面での医師同士の交流が断たれた。それとほぼ同時期にZoomをはじめとするWebによる講演会や研究会、学術会議などが主たるコミュニケーション機会となつて久しい。いつしかZoom操作にも慣れ、天候に左右されないことや移動時間・経費の節約が可能な点などの利便性も加わり、リアルのおける討論に参加しなくても満足し、人とのつながりが疎遠になった感否めない。

さて、それまで東京に参集し激論を交わしていた(以前に比べればすでにおとなしくなっていたが)早期胃癌研究会もご多分に漏れずWeb開催となった。回数を重ねるごとに読影操作や症例提示は初期に比べると随分とスムーズになったものの、視聴者からの意見は発言権付与者が中心ということもあり、ますますおとなしくなるといった負の側面がある。そして実際の会場での読影や聴講といった特別な緊張感も、リアルではない、すなわち他人の目がない空気感ゆえに減少したと個人的に思っている。

前述のような背景から、何か本誌読者の琴線に触れるような企画はないものかと考えられたのが既刊第56巻9号(2021年)で好評を博した『「胃と腸」式 読影問題集—考える画像診断が身につく—』であり、引き続き発刊された第58巻4号(2023年4月増大号)の『「胃と腸」式 読影問題集2023 基本と応用』である。幸いなことに両者は販売数からも大変な好評をいただいたのだが、それは鑑別診断に苦慮した、または誤診した疾患で、かつその解決策があるような難解な症例を、読者が挙げられた鑑別診断を1つずつ除外しながら最終診断にたどり着くという「診断過程」に共感いただいたためと思考している。かつて実践されていた研究会における診断・読影経過が紙上を通じて疑似体験できる内容が興味を引いたとも言えるのではないだろうか。早期胃癌研究会の運営・読影委員を中心に美麗で内容の濃い珠玉の症例を、丁寧な解説とともに問題を作成していただいたことにまずは誌上を借りて感謝申し上げたい。その各症例内容に逐一触れることはしないが、臨床病理学的に問題となった症例について、その「理由・原因」と「対策」に重きを置いて、早期胃癌研究会での検討内容に迫った症例集

となったのではないか。その評価は読者の感想や購入行動により下されるだろう。

①美麗な臨床材料の画像を「診断へのアプローチ」内で所見を中心に記載し、②結果を「臨床経過」ないし「病理診断」項目内で述べ、③診断過程で重要な点を「診断のポイント」「プラスONEポイント」などの項目内で明らかにする、という記載の流れは従前のテキストなどにはない出色の構成であると自負している。サブタイトルが「応用と発展」となったのは、第58巻4号を「基本編」としたかったのであるが、執筆者の中にはより強い思い入れのためか基本を超える疾患、診断過程が含まれており本号の前編である第58巻4号のサブタイトルが「基本と応用」となったためという裏話がある。本号では前編までを上回る希少な疾患も含まれているが、基本となる鑑別診断を挙げる根拠、そして肯定・否定する画像所見を提示するという王道は全執筆者に共通している。

閑話休題。筆者は学生時代にワンダーフォーゲル部に所属し(他に陸上部やギター部でも活動し遊び呆けていた)、本気の山岳部とは異なり夏山だけアルプスの高みを目指した。未明の肌寒い山頂で来光をみた際の感動は、それまでの道程の疲れや不安を瞬く間に払拭させるほど記憶に焼きつけられたのだが、この想いは登山経験者なら相槌を打たれるだろう。頂きを目指すルートは一つではなく複数あり、別県からのアプローチなどさまざまだ。本特集での各執筆者には文体の特徴(よい意味での癖)があり、鑑別診断やその除外診断の思考過程は全く同一ではない。しかし、目指す「根拠のある診断」という頂きは全執筆者の総意とも言えよう。診断過程(読影方法)に多少の違いこそあれ、正解にたどり着く情熱(診断方法、説得させる精緻な画像など)は同じであり、これは山頂を目指すクライマーと近似する。

コロナ禍がほぼ明けた今、少しずつリアルな討論の場が増えつつある。読者においては本号を熟読し、早晚読影者に指名されるその日に備えられたし。根拠をもって診断し、結果として正解にたどり着けなかったとしても、それはそれでよいのではないか。必ずや次に生きてくるはずである。「日々是前進」、本号がその一助となれば幸いである。

総合犬山中央病院消化器内科
小澤 俊文